

日本古典文学からみるナル表現

山本 美紀（創価大学）、守屋 三千代（創価大学）

1、はじめに

本発表は、「ナル」の用法をめぐり、古来、日本語話者が事態の出来・変化・成立などをどのように捉え「ナル」を用いて表現してきたのか、また、そうした事態を話者自身がどのように位置づけして表現してきたのかを、認知言語学の事態把握の観点から年代を追って考察するものである。

本居宣長は「古事記傳」巻3で「ナル」の語を以下のように「出現」「変化」「成立」の3種類に分類している。（以下、下線部山本）

一つには無りしものの生り出るを云ふ、人の産出を云も是なり。二つには此の物のかはりて彼の物に変化を云ふ、豊玉比売命産坐時八尋の和邇に化りたまひし類なり。三つには作す事の成終るを云ふ、国難成の類なり。

この分類に基づいて「古事記」の「ナル」表現を調査した結果の一部が以下の8例である。

1. 天地初めて発くる時に、高天原に成りし神の名は、天之御中主神。次に、高御産巢日神。次に、神産巢日神。此の三柱の神は、並に独神と成り坐して、身を隠しき。
2. 次に、国稚く浮ける脂の如くして、くらげなすただよへる時に、葦牙の如く萌え騰れる物に因りて成りし神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。
3. 投げ棄つる御禪に成れる神の名は、道俣神。次に、投げ棄つる御冠に成れる神の名は、飽咋之宇斯能神。次に、投げ棄つる左の御手の手纏に成れる神の名は、奥疎神。
4. 窃かに其の方に産まむとするを伺へば、八尋わにと化りて、匍匐ひ委蛇ひき。
5. 神倭天皇、秋津島に経歴ましき。熊と化れるもの爪を出だして、天の劍高倉に獲たまひき。
6. 其の妹伊邪那美命を問ひて曰ひしく、「汝が身は、如何にか成れる」。
7. 「吾が身は、成り成りて成り合はぬ処一処在り」とまをしき。爾くして、伊邪那岐命の詔ひしく、「我が身は、成り成りて成り余れる処一処在り」
8. 故、此の吾が身の成り余れる処を以て、汝の身の成り合はぬ処を刺し塞ぎて、国土を生み成さむと以為ふ。生むは、奈何に」とのりたまひしに……

1～3までは神の出現や誕生を表しているため「出現」の意味の「ナル」と考えられる。4、5は、「化」の字が充てられていることから「変化」の意味の「ナル」と考えられる。問題となるのは、6～8であろう。伊邪那岐と伊邪那美の国生みの場面で、「ナル」の語が頻出する箇所である。国生みの場面であるため、「出現」の意味と解せるようだが、1の「高天原に成りし神」と7の「成り成りて成り合はぬ」は同じ「出現」とは言い難い。かといって、その他の「変化」や「成立」とも解し難い。

さらには、「出現」として考えていた1～3についても、高天原という場所に突如として神が誕生し、現れたというよりも、既にどこかに存在していたものが高天原に姿を現して、それを目で確認できたという表現のように捉えられる。これらのことから次のような仮定を導くことができる。

1つは、「ナル」の語は、「出現」の意味だけである場合、「成立」とも「変化」とも捉えられる場合など、多重に意味を捉えられるため、本居宣長が分類した3つの意味だけで捉えることができないのではないかと推測できるということである。そうであるならば、「ナル」という語は宣長の行ったような体系的な分類ではなく、多重に意味を帯びる語なのではないだろうか。

もう1つは、「出現」と捉えられる「ナル」は、新物の出来ではなく、既に存在していたものが姿を現

したことを目で確認できたという状態を指す語であると考えられる。その意味で、新しい神の誕生に用いるのは適切ではないと考えられる。

このような観点から、各年代の代表的な文学作品に調査を拡大して考察することとする。

2、調査対象とその方法

調査は作り物語、物語内容に移動がみられる物語を選び、次の7作品に対して行うことにした。1「古事記」(上代)、2「竹取物語」(中古)、「3土佐日記」(中古)、4「平家物語」(中世)、5「宇治拾遺物語」(中世)、6「好色一代女」(近世)、7「浮雲」(近代)。これらの作品を、次の条件に基づいて調査している。

- 「なる」と「なりぬ」の2語の用例を検索し、その語が「出現」「変化」「成立」のいずれかの意味で捉えられるかを調査してみる。
- 使用する本文は『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠り、その他の書籍(写本)までは今回は対象としていない。

3、調査内容の提示

3-1 古事記

9. 次に、成りし神の名は、国之常立神。次に豊雲野神。此の二柱の神も亦、独神と成り坐して、身を隠しき。
10. 御足方に匍匐ひて哭きし時に、御涙に成れる神は、香山の歎尾の木本に坐す、名は泣沢女神ぞ。
11. 水滌、紅の紐に払れて、青きは、皆紅の色に変わりき
宣長が「ナル」の1つ目の例としてあげているのが「無ししもの生り出る」「人の産出」を意味する「ナル」であり、一応、「出現」と呼ぶ。先出の1～3や9、10がこれにあたり、「古事記」の神の誕生、国生みの場面に頻出する。同じ創世を描いた「日本書紀」にも「ナル」の語は見られるが、用法に違いがある。10と同じ神の誕生の場面は、「則ち頭辺に匍匐ひ、脚辺に匍匐ひて、哭涙き流涕したまふ。其の涙に壁ちて神に為る。」(日本書紀)と表現され、涙が変化して神になったと捉えられ「出現」と等とは言い難い。このような意味の「ナル」は古事記(一部「日本書紀」)では見ることができ、現代では使うことができない。唯一、「林檎の実がなる」のような場合にのみ使用例が残っている。
なお、「古事記」では漢字の使い分けによって意味の異なりを表現していたようで、先出4～5や上記11のような変化の場合は「変」や「化」の字を充てている。しかし、宣長の示した「作す事の成終る」との意味を示す「ナル」は「成」であると断定し得ず(先出6～8)「ナル」の語が体系的に分類できないことを示している。

3-2 竹取物語

12. 見でやあらむ」とて、なほ月いづれば、いでるつつ嘆き思へり。夕闇には、物思はぬ気色なり。月のほどになりぬれば、なほ時々はうち嘆き、泣きなどす。
 13. 翁答へて申す、「かぐや姫をやしなひたてまつること二十余年になりぬ」
 14. すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば……
 15. この皇子は、「一生の恥、これに過ぐるはあらじ。女を得ずなりぬるのみにあらず……」
- 12～15の用例はいずれも「出現」の意味の「ナル」でないことは明らかだが、「成立」や「変化」のいずれかに分類することもできない。12は、出来たわけでも、個体が変わったわけでも、何かを作ろうとしてできた、成立したわけでもない。物理的な変化や時の経過というよりも、語り手が捉え、価値付

けた時を表しており、主観的でありと言い得る。

13も同じく、「なりぬ」は「二十余年に至った」との一定の区切れに至ったという意味で成立を表している。しかし、「二十余年なり」（断定）ではなく、「二十余年になりぬ」（ナリ+完了）と表現していることから、単純な時間の経過ではなく時間の長さを伴うような主観的な表現と考えられる。これらは「古事記」には見られない表現で、語り手の心情が現れやすい物語の語りであるためと言えるかもしれない。

14は変化と考えられるが、「大きに」や「よきほどなる人に」との結果が示されているため、それに至るという点で成立とも考えられる。反対に15は「得られずに終わった」との不成立を表しており、この用法は現代日本語では見られない。未成就の状態にあることも示せる例であると考えられる。

3-3 土佐日記

16. 七日になりぬ。同じ港にあり。今日は白馬を思へど、かひなし。
17. 見送らむとぞ、この人どもは追ひ来ける。かくて漕ぎ行くまにまに、海のほとりにとまれる人も遠くなりぬ。船の人も見えずなりぬ。
18. かかるあひだに、みな夜明けて、手洗ひ、例のことどもして、昼になりぬ。
19. また、船君のいはく、「この月までなりぬること」と嘆きて、苦しきに堪へずして、人もいふこととて、心やりにいへる。

「竹取物語」同様に、暦が変わった、人が遠くなったなどはあくまで語り手の主観で捉えたことである。とりわけ、17の「人も遠くなりぬ。船の人も見えずなりぬ」との表現は、離れているのは語り手自身であるため主観的な事態の捉え方をみやすい。これまで述べたことと同様、一見、変化を表しているように見えるが個体の変化ではなく、時の流れや空間移動を主観的に捉えた例と言い得る。

3-4 平家物語

20. 主人明年御元服、御加冠、拜官の御さだめの為に、御直廬に暫く御座あるべきにて、常の御出よりもひきつくるはせ給ひ、今度は待賢門より入御あるべきにて、中御門を西へ御出なる。
21. 一時がうちに、灰燼の地とぞなりにける。家々の日記、代々の文書、七珍万宝、さながら塵灰となりぬ。
22. いつしか又関の東へおもむかれけん心のうち、おしはかられて哀れなり。四宮河原になりぬれば、ここはむかし延喜第四の王子蟬丸の、関の嵐に心をすまし……
23. 惜しからぬ命なれども今日までぞつれなきかひのしらねをもみつ清見が関うち過ぎて、富士の裾野になりぬれば

20は帝がいらっしゃることを表しており、「出現」の意味として捉えることも可能である。これは「〇様のおなり」との表現につながるのではないかと推測できる。

21は「灰燼の地と」「塵灰と」との到達点がされているため、変化の意味を表す「ナル」と考えられる。

22、23のような表現は「平家物語」の「海道下り」の段で繰り返しみられる。「土佐日記」の17～20と同様に、語り手が主人公移動を周囲の変化によって捉える表現であり、主観的な事態の捉え方と言える。その結果、事態を捉える人物の、「哀れと思う・つれなし」などと感じる「目」が浮き彫りになっている。これにより海道下りが名文として位置づけられているのではないかと推測できる。

3-5 宇治拾遺物語

24. 不動の呪を唱へてあたるに、「夜中ばかりにやなりぬらん」と思ふ程に、
25. 柑子三つが布三疋になりたり。この布の馬になるべきなめり」と思ひて
26. この翁の法師になるを随喜して

24も語り手自身自身が捉える事態の変化であり、主観的な表現と捉えられる。仏教説話の多く集録さ

れている「宇治拾遺物語」には、25、26のような個体から個体への変化(変身)を表す表現も多くある。功德を表すには粗末な物が素晴らしい物への変化を示す事が最も効果的だったと考えられる。

3-6 好色一代女

27. 其男する程の事かしく見えてをそろしく。位とることは脇になりて、機嫌をとる事になりぬ。

28. むかしはかかる事にはあらざりしに、近年、遊女のごとくなりぬ。

27の用例の「機嫌をとる事になりぬ」の「事」は具体的な事柄が示されていないにもかかわらず、そうすることが不可避であることがわかる。この用法は近世になって初めて現れたと考えられ、現代の「結婚することになりました」につながるのではないかと推測される。

28の「遊女」は語り手自身を指している。具体的な事柄を指していないという点で27と同じであるが、「遊女のようにってしまった自分」という変化の意味でも捉えることができる。と同時に、一定の結果に至っているという意味では成立に近似するとも捉えられ、意味の確定が難しい語である。つまり、両者の違いについて分析的に捉える必要はないのではなく、現代人にもこの感覚が引き継がれているのではないだろうか。ここでは「遊女」の後に続く「ごとく」が比況なのか例示なのかの判別がし難い。この点は現代日本語でも同じであろう。

3-6-1 妹背山婦女庭訓

29. 禁裏守護の太宰の館、入鹿公のおなりとて、ざゞめき渡る奥女中。

「平家物語」20と同じく、高貴な人が「いらっしゃる」という場面で使われている「ナル」表現。「古事記」の1の「高天原に成りし神」のように、既にいる「入鹿公」が姿を現したことを目で確認できたという状態を指す語。

3-7 浮雲

30. 髪のもも大方は白髪になるに

31. この頃は言葉に針を含めば聞て耳が痛くなる。

32. 顔は赤くなる

33. アレ以来今日で五日になるが、毎日酒浸しだ

34. 昨日今日のように思う間に既に二年近くになる。

30~32のように、変化の意味としての「ナル」と捉えられるが、31などは主語が不明確であり、近世までに多く使われていた語り手自身の体感を主観的に表現している「ナル」表現と捉えられる。33や34などは主観的な表現と言えよう。

4、結論

日本語母語話者が主観的把握を行う傾向が顕著であることは、池上嘉彦(2007)をはじめ、多くの研究者によって指摘されており、そのことが日本語の「ナル」の用法からも見えてくる。とりわけ、時空間の捉え方が物理的ではなく、認知者がどのように受け止めたか—多くは長い時間が経過した・遠い場所まで移動した—と感じられた場合に「ナル」が使われる例、行為に至る経緯を人智を超えた力により「することにナル」と諦念の気持ちと結びつけた例などは、日本語のナル表現らしい用法だと言えよう。『古事記』には神の誕生の例が見られるが、その後こうした個体を捉えた例は変化に限られ、認知者による時空間の「変化」の例とともに、「ナル」は変化を表す動詞として捉えられ、現代に至っている。

「ナル」表現を通時的に調査した結果、特に『古事記』などで見られる出現・出来の用法は、ユーラシアの現代のナル相当動詞と共通する意味・用法が見られる。今後はこの点を検証していきたい。